

米水津村周辺の考古学上の

「遺跡・遺物」発見者の物語 (1)

はじめに

昭和二十年（一九四五）八月十五日、日本の敗戦により日本歴史の研究や、日本の歴史教育は一変した。

それまでは『古事記』や『日本書紀』などを根拠に天照大神（あまてらすおおみかみ）の天の岩屋戸や、神武天皇の御東征などの神話を事実の如く教育されてきた。

しかし、戦後から、人類はいつごろからこの地球上に出現したのか、場所はどこが最も古いのか。われわれ日本人は何処から来たのか、日本人は太古からこんな細長く狭い地形に住んでいたのか等の疑問を事実によって立証され、誰もが納得のいく歴史の研究であり、歴史教育となったのである。

いわゆる、科学的な学問を基礎にした日本歴史の時代となった。ここに「考古学」という学問が登場してきた。「考古学とは、遺物や遺跡によって人類の古文化を研究する学問である」と広辞苑にある。

これより、原始から古代の歴史へと述べていくうえで

市野瀬 仁

（会員・佐伯市長島町）

これから述べる原始・古代の歴史は、既刊の『米水津村誌』から除外した記事である。

「はじめに」の箇所のとおり基本方針を守ったところページ数が多すぎて削除せざるを得なくなった。とりわけ、遺跡・遺物の発見者に原稿をお願いしての事故、まことに失礼千万の結果となってしまう。そこで、窮余の策として『佐伯史談』に掲載させて頂いて、せめても

の失礼を償うことにした次第である。
順序としては、原始時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代の四回にわたり紹介することにした。

四つの視点を明らかにしておきたい。

一は、考古学上、米水津村から出土された遺物は、竹野浦から縄文時代の石斧一個発見されただけである。にもかかわらず多くの紙面を取って原始・縄文・弥生・古墳時代を記す理由は、「木を見て森を見ない」弊をさげたいためである。

二は、米水津村の北に接する鶴見町と、南に接する蒲江町及び佐伯市に注ぐ番匠川と、堅田川河岸地区は隣接地域であるので、やや詳しく述べることにした。

三は、佐賀県から宮崎県延岡市の北川入口まで、リアス式海岸という地形を考慮してとらえていくことにした。

四は、遺跡・遺物の発見者、あるいは地元の人々の生の説明を聞くことが、興味と理解を深めるという考えで記すことにした。

原始時代

旧石器 の発見

昭和二十四年（一九四九）戦後間もないころ、土器を持たない剥片石器が、日本に存在していることを発見した青年がいた。当時の

地質学者達は、火山灰のローム層の中に動物も人類も住むことの出来ないものと信じていた。

所は群馬県新田郡笠懸村宇岩宿（いわじゅく）、雄大な赤城山麓の火山灰の関東ロームの堆積の中に「ついに見つけた定形石器、それも槍先形をした石器を。この赤土の中に……」と叫んだのは幻の旧石器を求めて十年余、相沢忠洋（二十三歳）青年であった。この剥片石器は、後期旧石器時代のものであった。この発見は、わが国最初の旧石器の存在を立証した記念すべき出来事であった。これを契機に各地で無土器文化時代の遺跡調査が活発化したのである。

これより十年程過ぎた昭和三十六年、大分県南海部郡本匠村宇津々に後期旧石器時代の人骨が発見された。佐伯地方のことが「日本歴史」（高等学校）の教科書や歴史地図の資料等にその名が出るのに二つある、一は旧石器時代の「聖嶽（ひじりだけ）洞穴」。二は、明治初年政治小説『経国美談』を書いた「矢野龍溪」の記事である。

聖嶽は、大分県南海部郡本匠村宇津々にある。この山の洞穴内から旧石器時代（一万五千年前）の獣骨等の中

から人間の頭蓋骨が発見された。この事実は日本で初めてのこと、生徒にその記事を見せ、話すと、驚きの喚声を上げる。ここで発見の契機を作った地元の人話を聞いてみよう。

聖獄洞穴の探索について 本匠村三股 高橋 智

昭和三十六年の春、佐伯市船頭町平岡屋旅館において別府大学教授賀川光夫先生より「埋蔵文化財について」と題して講演会が開催された。埋蔵文化財とは、洞穴古墳・耕地整理・道路開削等によって発見される化石・土器等のことであるとの話であった。

私は、本匠村宇津々の聖獄洞穴に沢山の骨の断片があるという話を古老から聞いていた。そこで、当時の本匠村教育委員会主事緒方計佐美君に、いっぺん探索をしてみようではないかと相談を持ちかけた。それで、この付近の地形に詳しい宇津々の染矢直三郎老人を雇って、三人で洞穴の探索をすることになった。

洞穴は宇津々道路より百五十メートル程登った山中にある。染矢さんは、トラックに使うロープを持っていっ

てくれと言うので、訳を聞いたところ、入口を少し入った所が三メートル程の崖になっているので、綱を使わなければ降りられないと言う。

ロープを伝わって中に入ると、洞穴の長さは四・五〇メートル位で、人が立って歩ける位の鐘乳洞であった。赤土の地面に白骨の断片が、至る所に散乱していたので何かの参考にと、肥料袋いっぱいに入れて持って帰った。その骨の中には、動物の下顎骨と見られるものがあった。外に犬でも猪でもなさそうなものもあり、何人かの人に見てもらったが分からなかった。後日、新潟大学の小片教授の話によれば、熊の骨ではあるまいかとのことであった。

その後、佐伯市で賀川先生に会う機会があったので、その骨を見て頂いた。先生は、随分古くて、既に風化しているものもあり、比較的新しいと思われるものもあり一度現地を見たいと言われたので、ある日案内した。その結果、先生は、これは学術的に調査する必要があると言われた。

昭和三十七年の秋、道路から電線を引いて、洞穴内に電灯の設備をして、本格的な調査の運びとなった。東京

教育大学日本考古学会長八幡一郎教授・慶応大学江坂輝弥教授・新潟大学小片保教授等の来援のもとに、考古学及び人類学の見地から調査が行われた。

調査に当たっては、別府大学の学生十数名も参加し、竹べらで土の上を少しずつ剥いで、どんな小さな物でも見落とさないように収集した。その時発見されたものは黒耀石・細石器・石核・土師器片・宋銭等であった。そのうち洞穴内中央付近に大型鐘乳落下石の下堆積土、第三層の底の方から、皿の型をした頭蓋骨の一部が発見された。旅館に帰ってから、土をよく洗い落として見た時の一同の喜びと驚きとの交錯した光景は、妖気さえ漂わせていた。

これは、後で聞いた話ではあるが、古代の縄文、弥生時代以来から現代人に至るまでの日本人にあてはめて見ると、骨の厚みが厚く、湾曲点に一致したものはないと言うのである。そして驚くことに、あの有名な北京周口店上洞人骨に似ていると言う。

さらに驚いたことに、フッ素含有量が〇・五六なので今から一万五千年以前ということまで判明したことであった。

私達は、大変なものに関係したものであると顔を見合わせたものである。

それでは、この発掘をされた賀川光夫教授の説明を聞いてみよう。

聖嶽洞穴と旧

石器人の発見

昭和三十七年（一九六二）から発足した日本考古学協会洞穴調査会

（八幡一郎委員長）は、その年の十月、大分県佐伯市郊外本匠村聖嶽洞穴（石灰岩）の発掘を実施した。この洞穴は、全長四十五メートルの長い石灰洞穴で、洞内は粒子の細かい土層を1層（一〇から一五センチ）、粘質軽楽層2層（一五から二五センチ）、粘土層3層（二五センチ以下）からなる。この層序のうち2層は、本洞の鐘乳活動停止以後侵入した小礫類であって、3層は、鐘乳活動時プール状態の洞内に堆積した細かい粘土質土壌であると考ええる。黒耀石のナイフ形石器および石刃の剥片の一部は全て3層上部、粘土層に数センチ埋没して発見されている。石器は全体として少量の発見で、洞穴内部での生活は考えられない。

人骨は、入口から十五メートルの位置で頭骨、二十五

メートル位置で距骨（足の後内方にある骨）と腰椎の一部が発見されている。特に頭骨出土地は、大落石が下面を3層に没して存在し、その下部より発見され、石器類の発見された層より若干深く埋没して発見されている。

この人骨は、化石状態の発達した重い骨で、頭蓋の厚さも一センチ以上に及び、層位的にも石器と同層、しかも頭骨は岩盤から発見されたという好条件をもって人類学的に興味を持たれた。

人骨の調査に当たった小片保（新潟大学教授）は、「聖嶽層女性人骨（壮年または熟年期）は、骨質の厚さその形態的特徴において、わが国で今まで発見された人骨のうちでは、まれにみる特異なもので、これに對比し得るものは、周口店山頂洞人 一〇一老人頭蓋骨である。現代人では、エスキモー・オーストラリア原住民及び中国人にこれと類似しているものをしばしば見る」と述べ、また、

「多少の疑いはあるが、頭高は低く、長頭骨に傾くであろう特徴を有している。ともかく出土状態と、旧石器相伴という考古学の上からの調査と、形質人類学に弗素調査を含めた科学的研究を重ねて、わが国では最初の旧

石器人骨の調査ということができると言うのである」

と云うのである。

私達の近い地域に途方もない遺物が発見されたものである。





豊の国創世紀展による



聖嶽洞穴の位置 (役場のベランダより写す)
右側稜線の上部